

高等学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（美術）

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員名簿（芸術・美術）

学 校 名	氏 名
都立光丘高等学校	○ 市川治郎
都立武蔵丘高等学校	◎ 宮道宗義
都立保谷高等学校	水口秀樹
都立稲城高等学校	八木哲夫
都立秋川高等学校	坂本都

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 大島克己

研究主題

青年期の表現の多様性を受け止めるための学習指導の研究

目 次

I 主題設定の理由	1
II 生徒の実態調査	1
III 授業研究	3
「生徒の表現意欲を引き出すために」－抽象彫刻－	3
「想像画の制作」－生徒の特性を引き出す指導の在り方－	7
「校舎の配色をデザインする」	11
「あなたにとって美術の授業とはなんだろう」－高校生を囲んでの パネルディスカッション	16
「完成作品を大切に」－作品の装飾性・利用度を高める－	21

I 主題設定の理由

芸術（美術・工芸）の目標は、より深い表現や鑑賞の活動を通して美的感性を高めるとともに、生涯にわたって美術を愛好する心情を育て、将来、生活の中で何らかの形で美術とのかかわりをもちつづける心を育てたいという点にある。そこには、表現することや鑑賞することを楽しいと感じ、あるいは、表現することや鑑賞することに対し満足感を体験することがぜひとも必要と思われる。

もともと表現や鑑賞の深さは、自ら望んで行為するところに生まれると思われる。特に、自我の確立期にある青年期の生徒が表現や鑑賞に求めているものが、どのようなものであるかを正確に受け止めることは美術科の授業を構成するうえで重要なことと思われる。

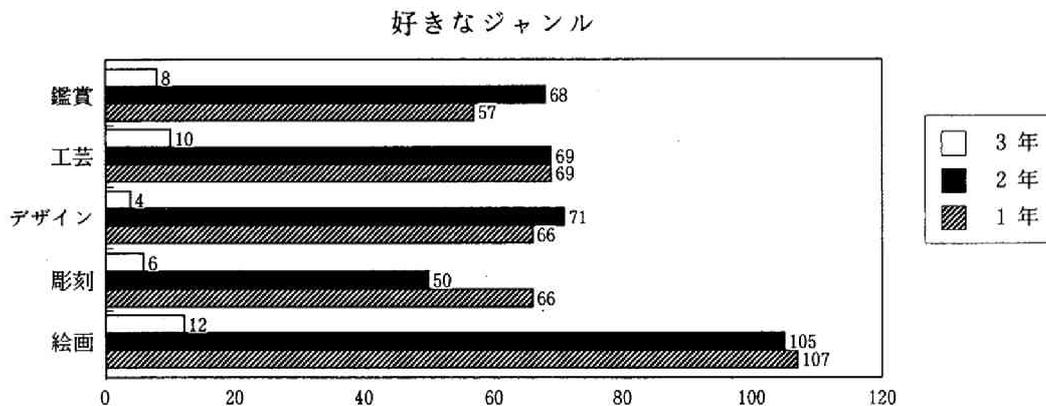
表現や鑑賞の授業の中で生徒が求めているものは、生徒自身が意識しているものと、意識していないなものがあると考えられる。いずれにしてもそこには多様な要素があると思われる。また、題材や素材に対する生徒の興味・関心の多様性等も重要な要素である。それらの要素や多様性を教師はどのように受け止め、生徒一人一人の制作意欲につなげていくかを研究することは青年期の美術教育にとって大切なことであると考えられる。

そこで、本部会では、「青年期の表現の多様性を受け止めるための学習指導の研究」を主題として設定し、生徒の美術科に対する意識調査を実施するとともに、授業実践を通してこの主題の解明をすることにした。

II 生徒の実態調査

1 美術の授業で好きなジャンルはどれですか。

(人)

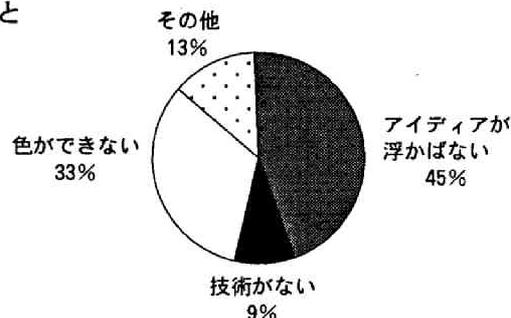


■ 絵画が好きだと答えている生徒が他のジャンルより多い。

2 美術の授業が思うようにいかないときはどのようなときですか。

(%)

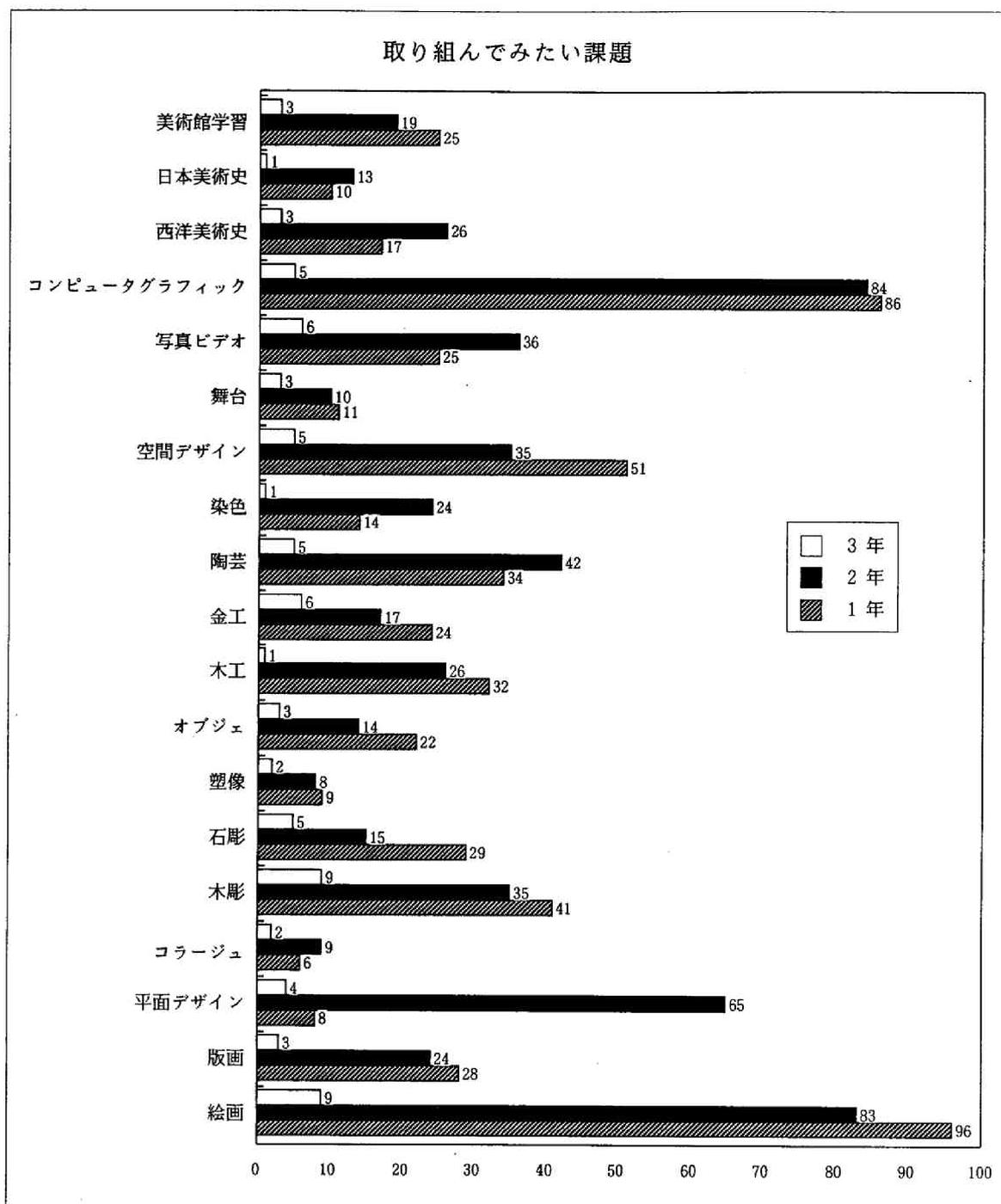
思うようにならないこと



■ アイディアが浮かばないことを原因にあげている生徒が45%いる。

3 取り組んでみたい課題

(人)



■ 絵画とコンピュータグラフィックスをあげた生徒が圧倒的に多い。

4 考察と研究の方向性

■ 生徒は絵画はあまり好きでないと思っていたが、絵画、特に描くことに対する欲求が強いことには驚いた。

■ この生徒の豊かな発想力や絵画的な表現力に対する欲求をどのように教師が受け止め、日常の授業に生かしていくかが本研究の課題となった。

Ⅲ 授業研究 「生徒の表現意欲を引き出すために」 — 抽象彫刻 —

1 研究のねらい

子供の頃は、誰でも自由に泥遊びを楽しみ、絵を描き、形を造ることを純粋に楽しんでいった。年齢とともに、自己にある一定の枠をはめてしまうようになることは否めない。

だからこそ、高校生の時期に、より純粋な形でもの造りを味わわせ、その楽しさを将来につなげたいということは、美術教育に携わる者の願いである。しかし、ともすると、日常の授業においては、生徒に授業での集中力を高めさせたいがゆえに、教師の指示を強め、生徒が自ら考える幅を狭めてしまうようなことがあるのではないかというジレンマに陥ることがある。

そこで、美術の授業の課題の中に、生徒と材料の直接的な対話の量を多くし、自ら興味・関心をもてるもので、教師の指示の少ない題材の開発を目指して本研究をすることにした。

2 指導のねらい

- (1) 生徒がものを造ることを進んで楽しむ態度を育てる。
- (2) 生徒一人一人に形が生まれてくる喜びを味わわせる。
- (3) 制作に没頭する体験を味わわせる授業を展開する。

3 指導のポイント

- (1) 課題の設定について

「木彫の抽象形態」 — 空間に存在する新しい形 —

- 触覚を重視した立体とする。
- 具体物にはとらわれない抽象形とする。
- 材料には木を使用する。

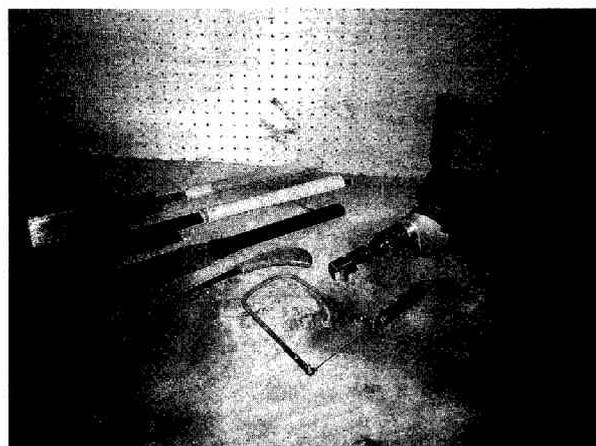
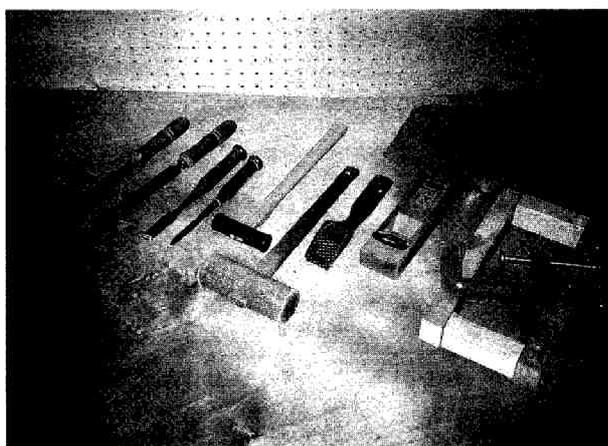
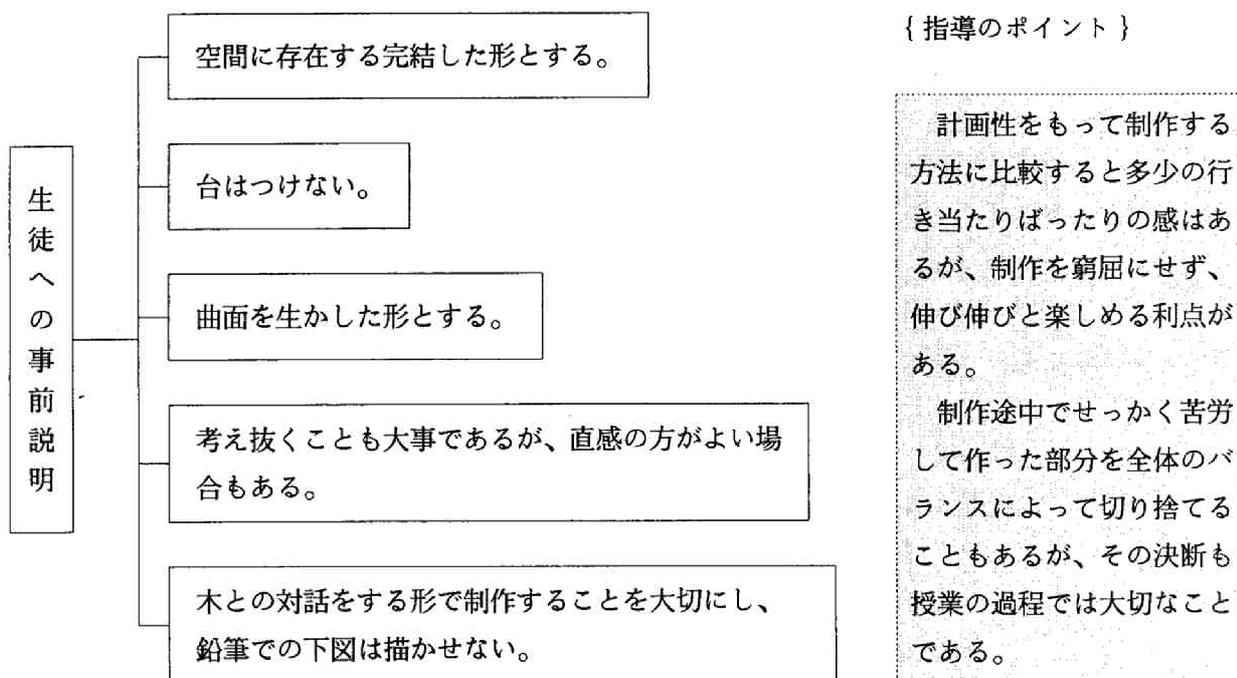
- (2) 木の有効性について

- しっかりとした材質感あり、感触がよい。
- カービングのため、やり直しがきかないが緊張感がある。
- のみで彫る技法に興味もてる。
- 制作過程に適度の負荷がある。
- 紙ヤスリで仕上げるため木目が美しい。

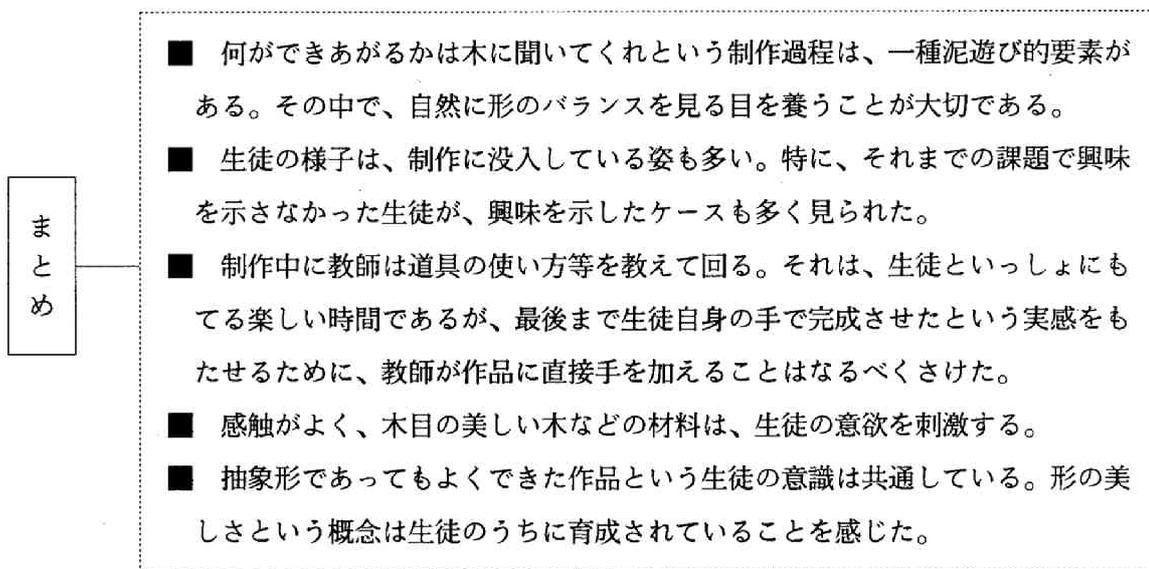
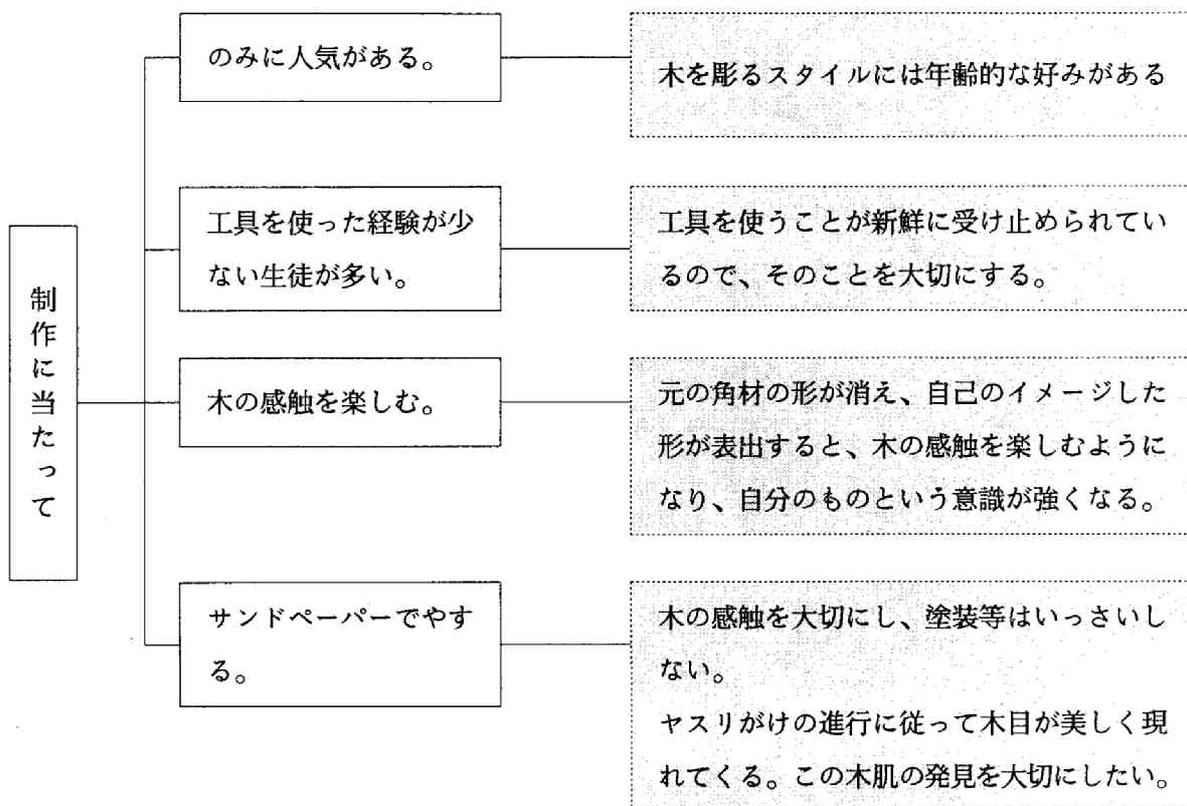
- (3) 材料と道具について

材料	桂材 83×83×250mm
道具	両刃のこ、まわし引きのこ、糸のこ、おしいれのみ、げんのう、木工用棒ヤスリ、サーフォーム、平かんな、電気ドリル、紙ヤスリ（#80、#120、#240）、補助用具として、クランプ、梓木、砥石等

(4) 指導の実際



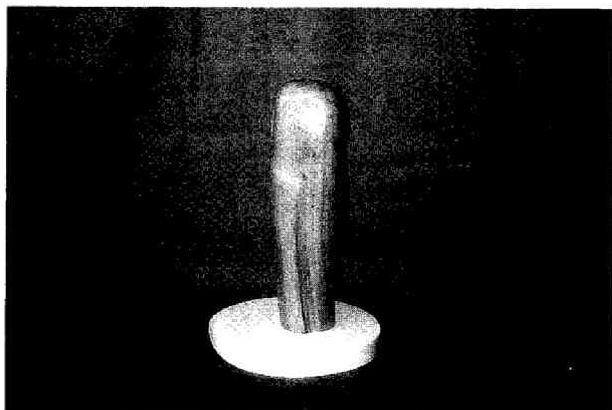
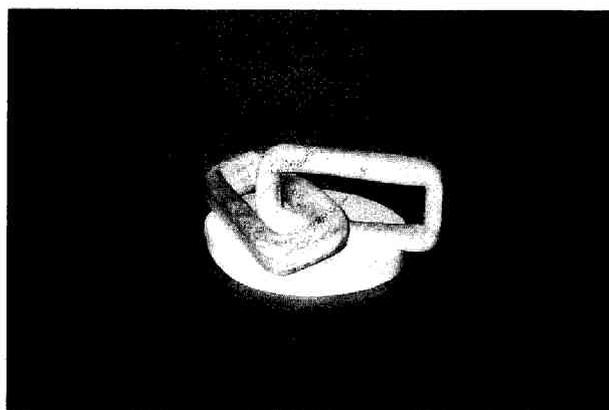
(指導のポイント)



4 成果と課題

この課題は、より多くの生徒に制作することの楽しみや制作することに没頭することを経験させることを目的としているが、授業中の生徒の様子から、次のような成果が得られた。

- 今までの平面作品等の計画性を必要とする課題では目立たなかった生徒が強い制作意欲を示した。
- 完成した作品に質のよい高度なものが多くあった。
- 生徒同士がお互いの作品を見せあう場面も多く見られた。
- 課題としては、木の大きさの問題がある。生徒によっては、木が大きすぎて負担になった生徒もいた。



「想像画の制作」——生徒の特性を引き出す指導の在り方——

1 研究のねらい

青年期の生徒は個性や人格の発達とともに、自分自身の直観的なイメージや思いを大切にしたいという欲求が強くなる。このような生徒の気持ちを制作意欲に結びつけ、より深く自己の内面につながるような充実した絵画表現を経験させたいというねらいから、想像画の制作を考えてみた。

想像画の制作では、生徒が心の中にあるイメージを探り、自己の内面と対話することが大切である。この研究では生徒が制作過程で表現技能にとらわれ過ぎず、自分の直感やイメージをのびのびと表現できるような指導の在り方や生徒の多様な特性の受け止め方、評価について考察してみた。

2 指導のねらい

- (1) 自分のイメージや発想に基づいた制作により、主体的な表現態度を養う。
- (2) 色や形、構成などの造形的な要素とその効果についての理解を深める。
- (3) お互いの作品を見せ合うことで、それぞれの特性の違いを受け止める豊かな鑑賞態度を育てる。

3 指導のポイント

- (1) 課題の設定 「木を主題にした想像画」——自分の感情や思いなどのイメージを表現する
材料：アクリル絵画、画用紙（27×38cm）

- (2) 制作意図を伝える

- 導入で木をテーマに孤独、幸福、怒りの3つの感情表現の違いを即興的に描かせる。
- 作者の思いが強く感じられる木を主題とした様々な作品をスライドで鑑賞し、作者がどのように色彩や形、空間設定、筆使いなどの工夫をしているか感じとらせる。

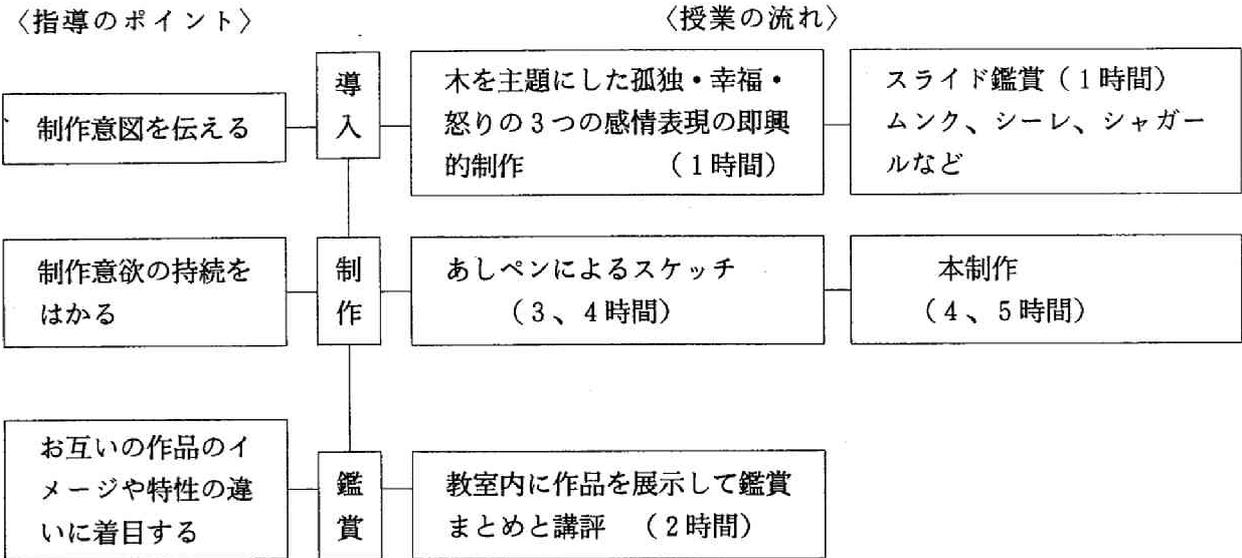
- (3) 制作への意欲の持続を図る

- 手頃な大きさの紙にスケッチを繰り返し制作することで、表現意図を明確にさせる。
- 自分のイメージを素早く明確に表わせる用具として、あしペンとインクを使わせる。必要に応じて、アクリル絵具で彩色する。
- 自分の内面との対話を視覚的につかめるようにするため、制作過程のスケッチをファイルして残させる。

4 評価の観点

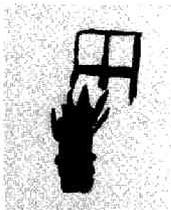
- (1) 自分のイメージを表現することに主体的な取り組みができたか。
- (2) 表現意図をもち、色彩や構図、筆使いなど表現の工夫を行なっているか。
- (3) お互いのイメージに興味を持ち、主体的な鑑賞活動を行なえたか。

5 指導の流れと指導のポイント



6 制作の実際

〈M君の場合〉 ストーリー性のある表現



孤独



幸福



怒り

- (1) 孤独・幸福・怒りの3つの感情表現が、状況の違いにより表現されている。



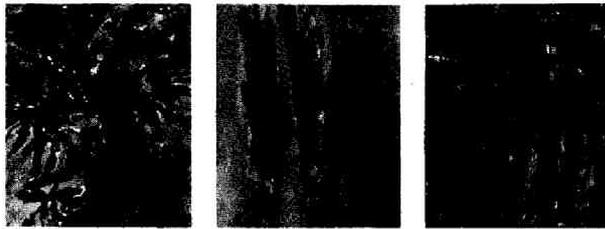
作品名「海の木」

- (3) 本制作では青く暗い夜の海の中に漂う木の様子が描かれ、文学的で夢想的な雰囲気表現している。



- (2) あしペンによるスケッチでは、孤独をテーマにさまざまな状況での木の様子を表現する試みが見られる。

〈N君の場合〉 色彩による表現

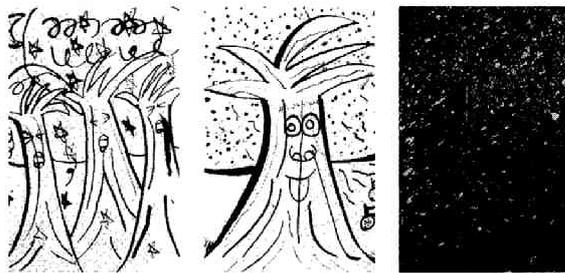


孤独

幸福

怒り

(1) 孤独・幸福・怒りの3つの感情表現が色彩形の違いとともに表現されている。



(2) あしペンによるスケッチでは、思うように表現の深まりが得られない。

〈S君の場合〉 感情移入による表現

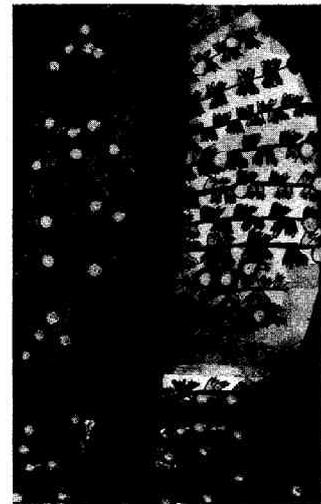


孤独

幸福

怒り

(1) 孤独・幸福・怒りの3つの感情表現が状態の違いによって表現されている。



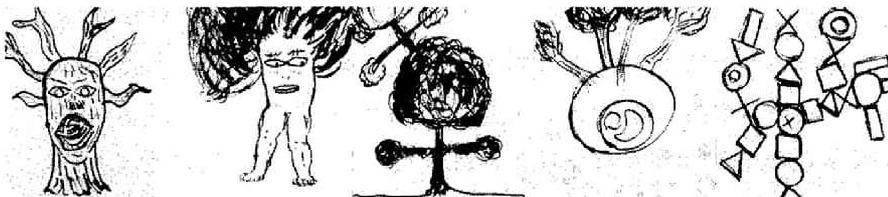
作品名「日本の秋」

(3) 校庭のいちろうの木を観察した後、神秘的な色彩効果の高い作品の制作を行なった。



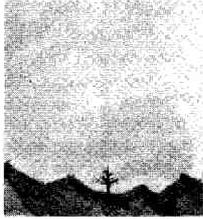
作品名「さけび」

(3) 本制作では不安をテーマに感情移入した木の表現を色彩や動きの工夫とともに行なった。



(2) あしペンによるスケッチでは、擬人化した木の表現が多くみられる。

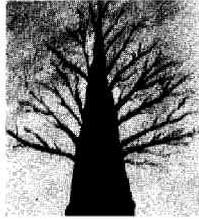
〈O君の場合〉映像性による表現



孤独



幸福



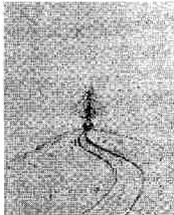
怒り

- (1) 孤独・幸福・怒りの3つの感情表現は映像的な手法で違いを表現している。



作品名「神聖として真実の世界樹」

- (3) 本制作では闇や光、いかりや希望といった対立する概念をひとつにまとめるという構想のもとに自己の明確なイメージをそのまま表現している。



- (2) あしペンによるスケッチでは、近くや遠くから見た木の様子の表現を試みている。さらに色彩を使って下から見上げた様子や木の葉の揺らぐ様子のスケッチを試みている。

7 まとめ

- 本校においては表現技能に自信がもてない生徒が多くおり、観察をもとにした絵画表現に意欲や関心を持続させることが難しい。直感力や想像力に恵まれた彼らがのびのびと自己表現の充実感を味わえるようにと考えたのがこの題材である。制作意図を言葉で伝えるのが難しいため、即興画の制作やスライド鑑賞によって、経験的に『内面的なイメージ』という意味を伝えたつもりである。その解釈は生徒の特性にまかせた。
- 制作の実際では、多くの生徒はお互いのスケッチを見せ合いながら、自分のイメージを大切に表現しようとする姿がみられた。あしペンと小さな画用紙は短時間にイメージを描きとめるのに役立ったようだ。また制作過程をファイルしたことは、生徒の試行錯誤や混乱、あるいは表現の深まりの様子を知るのに役立った。
- 素朴なおもむきの作品が多く仕上がったが、2つとして同じような作品がみられなかった。鑑賞の時には、自然とお互いの作品に興味をもつ雰囲気生まれた。うまいへたではなく、お互いの特性がよく表れていることを感想として述べた者が多かった。
- 講評では、教師が生徒の制作の様子や作品から受けとめた一人一人の生徒の特性やイメージについて述べるスタイルをとったが、このようなコミュニケーションは重要で、生徒は大変関心を持って聞いていた。できれば生徒どうしが意見を交せるようにしたいものだ。

「校舎の配色をデザインする」

1 研究のねらい

生徒自らが環境の造形デザインとして、自校の校舎の配色を考え、校舎改修事業に参加することにより、美術の授業と日常生活との結びつきを強め、美術への興味・関心を高める。

2 指導のねらい

- (1) 周囲の環境に調和した配色を考えさせる。
- (2) 様々な環境の造形デザインを鑑賞したり、お互いの作品を鑑賞し合うことで、環境との調和についての在り方や課題を追求させる。

3 授業のポイント

- (1) 生徒とのコミュニケーションを重視した導入 (1時間)

教師のコミュニケーション	生徒のコミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ■ 学校の全面改修があります。 ■ 工期は、校舎だけで1年、その間君たちはプレハブ生活です。 ■ 建築後20年で内外装とも傷んだから補修するかどうか相談があった。先生方の賛成が多かったのでやることになった。 ■ しばらく不便になるけどね、校舎の塗り換えなんて、度々やるわけないのだから、この機会にみんなで配色を考えてみよう。 ■ その通りである。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 授業どうするのーっ!? ■ クラブは? 文化祭は? いつまでかかるの? ■ プレハブなんていやだ! ■ そんなの聞いてない! ■ だれが決めたの? ■ 自分勝手だな! ■ 調子よくありませんか。 ■ 話ができすぎてませんか? ■ ……。

教師のコミュニケーション	生徒のコミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ■ まず始めに、現在の校舎配色の問題点を考えてみよう。 ■ どうして、そう感じるのだろうか？ ■ それじゃあ調和するにはどうしたらいいと思う？ ■ みんなが「これは調和した色の建物だ。」と思うものを教えて下さい。 ■ 参考資料を見て考えてみよう。 (ビデオで様々な建築を見る。) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 暗い。汚れた感じ。センスが悪い。 ■ 黒っぽい赤色で塗られているから。 ■ ピンクも気持ち悪い。 ■ 配色が悪いんじゃないかな。 ■ 隣が緑の多い公園なのに調和していない。 ■ なんか、ほこりっぽい感じがする。 ■ もっと目立たない色にする。 ■ 緑系の色にする。 ■ 明るくさわやかな感じにしたほうがいい。 ■ 安っぽいのはいや！ レンガ張りで豪華さをだしてほしい。 ■ ステンレス板を張って、ピカピカ光るのもかっこいいと思う。でもまぶしくて周りに迷惑かもしれない。 ■ 原色を使ってアクセントをつける。蛍光塗料なんかも受けるんじゃないの？ ■ ディズニーランドのお城。国立競技場 ■ 国会議事堂。東大寺の大仏殿。姫路城。 ■ N高校の校舎。光丘IMAのビル。 ■ 東京都美術館。サンシャイン60。 ■ 名前は知らないけど、壁に大きく絵が描いてあるビル。 ■ パルテノン神殿。タージマハル。 ■ 反射ガラスで、景色の写る建物。 ■ 新宿副都心のビル群。 ■ ハウステンボスの町並み。 ■ 北京の紫禁城。チベットのポタラ宮。

教師のコミュニケーション	生徒のコミュニケーション
<p>■ 「調和する」というのは、どういうことだろう。</p> <p>■ 「周囲の環境と調和した配色の校舎」をテーマにして、各自デザインを描こう。</p> <p>■ 出る予定はありません！</p>	<p>■ 周囲にまぎれて目立たないこと。</p> <p>■ 明るさが、周りと似ていること。</p> <p>■ 緑の中にある赤い建物のように、補色関係の色を使う。</p> <p>■ 見る人が、ほっとするような色づかい。</p> <p>■ 学校らしさのでている建物。</p> <p>■ なんか、うまく丸め込まれた感じ…。</p> <p>■ でも採用されたらカッコいいよね。</p> <p>■ 先生っ！ これ賞金出るんですか？</p> <p>■ 残念だな…。</p>



(現在の校舎写真 正門側)

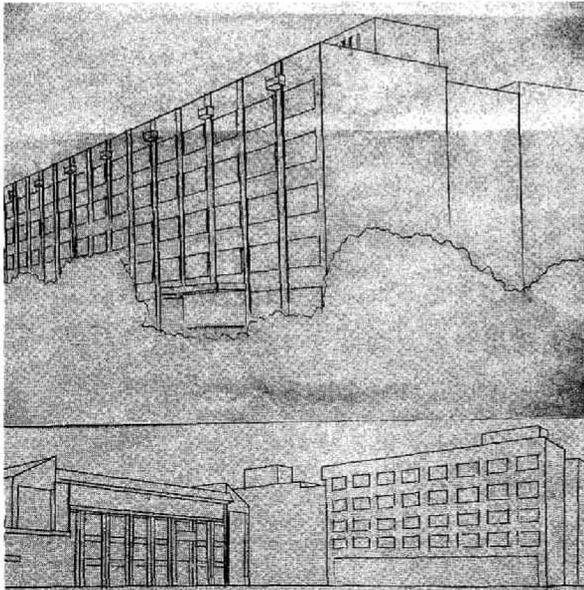
(校庭側)



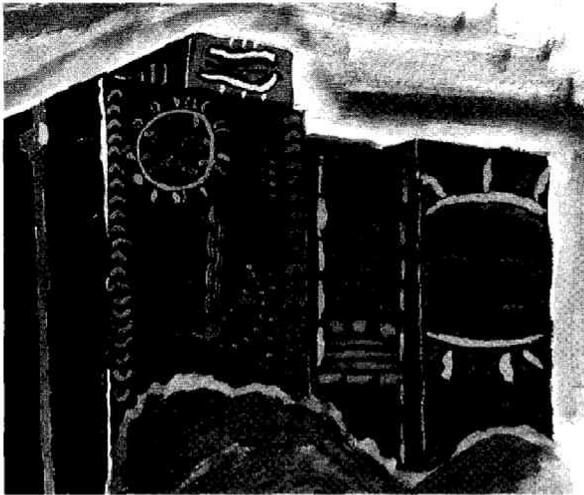
(2) 授業での実際の制作 {スケッチブックに描く (6時間)}

- 校舎正門側と校庭側の下描きをする。(パースを写す)
- それぞれ、自分の好きな配色で塗る。
- 配色のコンセプトを書く。
- お互いに講評しあい、問題点を探る。

(制作過程・パース2枚)



(作例1)



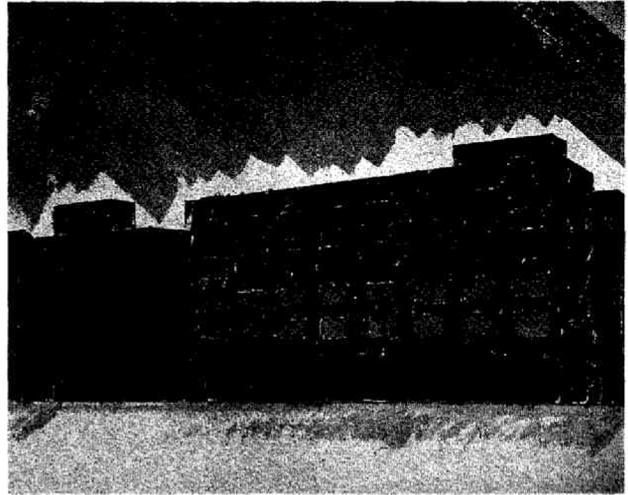
「校舎の壁がとても寂しいので、にぎやかな絵を描いてみたい。元気がでると思う。」

(授業風景)



「細かい色塗りって、けっこう難しいんだよね。」

(作例2)



「ソフトなパステルカラーで塗り分ける。」

4 評価

できあがった生徒のパースを分類すると次のような傾向がみられた。

- (1) 思ったより派手な(彩度の高い)色あいの作品が多い。
- (2) 学校らしさや落ち着いた雰囲気を出すのが難しい。
- (3) 斬新なイメージの作品が多く、エネルギッシュである。

■ 生徒の言葉（作品のコンセプト）

気高い丘に太陽の光を受けて、さわやかな朝日の中のH高校。緑あふれる光丘に若い希望と夢をもって、若人の集まるH高校。そんな、若さとさわやかさを兼ねた色でイメージアップを図る。

未来都市には、こんなさわやかさが必要かもしれない。

何色だかはっきり言えない。あくまで中性的に。これからは「中性的」という言葉がポイントになると思う。

様々な人に受け入れられる、「中性的な色」。

そんな色にこだわってみました。

暖かく 私たちを受けとめてくれる校舎。優しさのある校舎。

多くの人たちがあこがれる校舎。

いつも変わることのない、生命力にあふれる校舎。そして思い出に残る校舎。

5 今後の課題

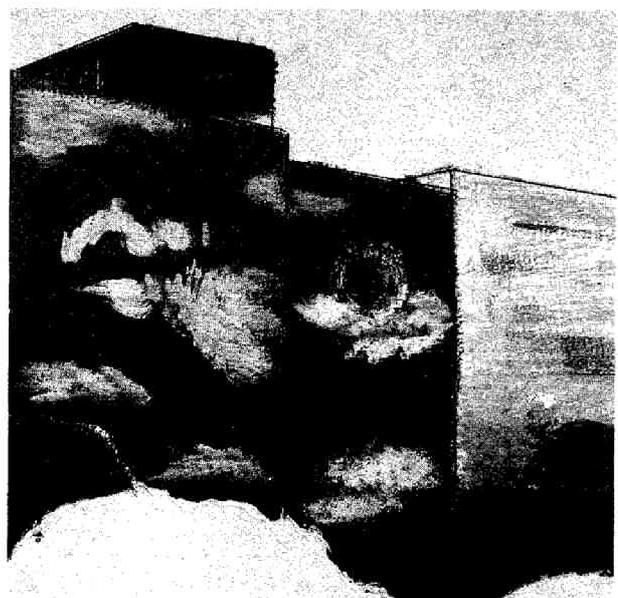
- (1) ありきたりの（街中でよく見かけるような）配色にはしたくない。
- (2) 四季の移り変わりに配慮し、周囲に映えるような校舎でありたい。

（作例3）



「空と雲と森の緑を描く。光丘公園の一部になれると思う。」

（作例4）



「校舎に虹や太陽が出ていたらきっとみんな喜ぶでしょう。」

「あなたにとって美術の授業とはなんだろう……」

～高校生を囲んでのパネルディスカッション～

1 本研究のねらい

我々美術教師は「何を教え、そのためにどう実践すべきか」そこを問題の原点としてきた。特に、芸術教科の特性は、すでに出来上がった価値体系の伝授よりも、造形を通して生徒一人一人が自ら体験していく場を実現することに最も教科としての意義があるのではないかと思う。そこで、生徒が目指す美的体験の実現のために、我々美術教師は、「生徒が期待する授業、教師のパーソナリティ、そして美術を通して得られる最高の充足感」などにいつも謙虚に目を向け、教師自身の価値概念と比較しながら、緊張感のある生徒との人間関係を保ちつつ、「何かを生み出す」創作者として付き合っていく姿勢を前提にしなければならない。

特に、美術を選択する生徒は感性に富み、教師の造形力のみならず、人格までも鋭く見抜く傾向がある。そのような生徒たちの教師への期待に応え、我々美術教師の在り方を顧みろきっかけとするために、このディスカッションを行った。

2 ディスカッションのテーマ

- (1) 今までに最も印象に残っている美術との関わりについて。
- (2) 美術の授業はどうして必要か、何が大切か。
- (3) 美術の先生はどうあるべきか。
- (4) 美術に没頭することで生徒自身にもたらす一番大切なことは何か。

— 生徒とのディスカッションの内容より —

日 時：1995年10月19日（木）都立F高等学校 第1美術室

メンバー：生徒 8名 3年選択女子 S1、S2、S3、S4、S5

男子 S6、S7、S8

教師 1名 T

T	それでは今日は美術の生徒と一緒にディスカッションをしたいと思います。このディスカッションのねらいは、先生から一方的にこういうふうにするべきであるとか押しつけ的なものではなく、君達生徒側がこんなことをしたいとか、生徒自身の生の声をもっと、他の先生達に聞いてもらいたいという僕のねらいで行うものです。テーマの4つに関して話を進めていきたいと思います。僕も君達と同じ立場で考えを言いますから、君達も気楽に言って下さい。これからまず君達にテーマ「(1)今までに最も印象に残っている美術との関わりについて。」についてなんですけれど、どうだろう。S6君？
S6	具体的な例？ そういうものはなくて、いつも描いたり、つくったりしているのが気持ちいい。それが一番だというわけではないけど、美術って言葉にならないじゃないですか。見たり感じたりすることでしょう。そういうものが、かたちにできるといことがうれしい。いつも印象に残るといえば残っています。

S 4	ずーっと絵を描くのが好きで、高校に入って何かガチャガチャやっていて、結局のところ、やはり私は絵を描くのが好きなんだということがわかってきて今描いているわけなんです。「空間」とかわからないし、いろいろ塾の先生とか難しいこと言うし、こう「出てくるかんじ」とか、いろいろなこと言うけれど、自分でやんなきゃわからないし、描いて嫌になっちゃうこともある。嫌になってもやっぱり絵は描きたいし、そういう感じしか心にはない。
T	僕だって同じだよ。ただ高校生の頃、芸術っていうのを真剣にやってみるとやりがいがあって、最初石膏デッサンってのを一回はチャレンジするよね。それで10数時間かけて、苦勞して描いたんだけど結果的に先生にそれを全部消されてしまった。けれどもその後パッと描いたらすごくうまく描けたんだ。それは全部自分の力だから、それだけで自分にとって描くことが自分のモノになったというかんじがあって、そういうことを一つ一つ経験しているだけなんだ。今でもね……。
S 6	おかがすいたらゴハンを食べるじゃない。絵を描きたい時っておながすいた時と似ているのよね。それで絵を描いたらゴハンを食べた時と同じような幸せな気分になれるから……。ウーンとだから、そんなかんじ。
T	それでは最初に君達が美術を好きになったきっかけを聞いたわけだけれど、これから聞きたいテーマ(2)「美術の授業はどうして必要か、何が大切か。」に入ります。まず現実的な問題として美術が減らされそうなんだ。ゆとりとか個性化の授業が必要といっても、こういうものはごく一部の人だけのものとか、受験には関係のないものとかという理由で、完全に選択にできなくともいいという考えになってきている。それだけに、どうして美術の授業は必要か、何が大切なのかははっきりさせなくちゃいけないと思う。そこで君達からもっとPRして欲しいんだ。
S 7	だけど、一般的に美術が好きでない人はそう思うだろうね。なくしちゃいけないけどね。
S 6	うまいとか、へたとかというよりも、表現するということに意味があると思う……。
S 4	中学校の頃、美術がすごく好きな子がいて、確かにその子はいまうまかったけど、先生がその子のこと嫌って、すごい成績をつけられたんです。楽しくやってたんだけど、今でもそのことをけっこう気にしています。先生につぶされちゃうってことあるよね。
T	なるほどね。テーマ(3)の「先生はどうあるべきか」ということも含めて、どんどん発言してくれるかな。大事なことだね。はっきり言って僕も今でも自信はない。いや本当だよ。
S 5	先生はいい方だよ。〈笑〉
T	いや、どうもありがとう。ただ僕はいつも自分がつくるという意識をもっていることだと思う。30、40、50歳になってもいつも自分がつくるんだ、つくるんだという、何かを生み出すという意識さえ失わなければ、自分の考えというものをストレートに言ってもいいと思うけれどね。僕はこう思うということ絶対正しいとはいえないけれど、少なくとも実際に長くつくり続けているのであれば、こうなんだと言える立場にあると思う。僕は少なくとも美術の先生というのはその姿勢だけではなくてはいけないと思う。
S 8	先生への評価で、その教科の好き嫌いは必ずあるよね。

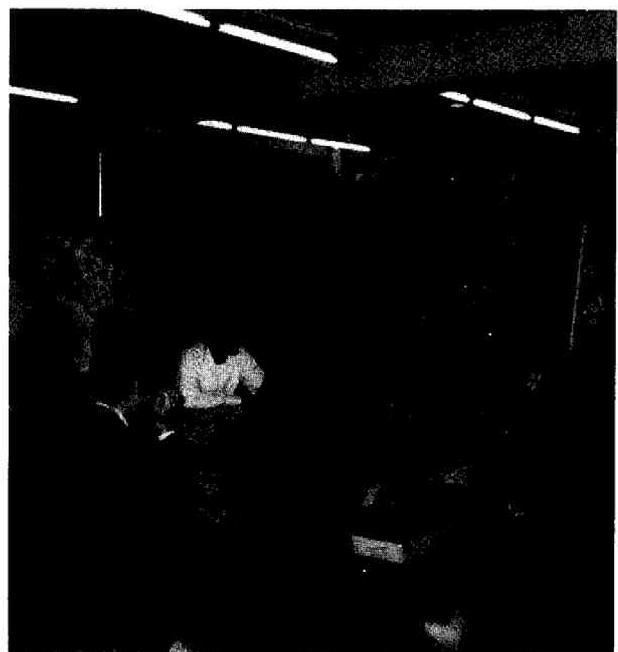
T	そこでもう一度、美術の授業はどうして必要かと言うことだけど、嫌でも何かを生みだすとか、作りだすとかとりあえず、お尻を打たれないとやれないよ。その経験というのは高校時代しか味わえないものがある。大人になって現実的に生活の中で、そんなにそういう経験をやれるというものではない。
S 8	方程式を解けばそれですむというものばかりじゃなくて、もっと人間性を考える授業が必要だと思う。
S 7	芸術関係は唯一得点にあらわれない。そういう世界をみんな知るべきで、何でも白黒ある世界を思うのはおかしい。
S 6	大きく言えば、そういう美術の授業のようなものを減らすということは、機械人間をつくるというか、思想統制みたいなものでしょ。だからもっと美術のような授業を増やして、一人一人の価値観を増やして、例えば、それが反発心だったり、人それぞれの個性を育てることが授業だと思う。
S 7	僕のように昔から美術が好きなのはいい。勝手にやるから。問題はそれ以外の人達です。中学、高校の時はそういう機会を与えないといけない。中にはずーと算数が得意だったけど、中学に入ってちょっと美術をやっていると得意になってしまう人もいる。国語でも数学でも、美術も出会うという点からみれば同じはずじゃない？
T	そうだよ。本当はそうあるべきだけど、多分、評価ということにこだわるんだよ。他の教科はテストとかはっきりできるじゃない。けれども美術はさっきから言っているように、先生の主観によるからといって、客観性がないと大事にしないと思うんだ。だからやはり、先生がどうあるべきかということはこの教科はかなり大事なことなんだよ。ずっと大事なんだ。一見、勝手にやっていたらいいという感じだけど、多分美術の先生によって、作品の傾向やそのでき方ができるよね。そこでやはり美術の先生はどうあるべきか。
S 2	先生はね、知らないことを教えてくれなきゃ困る。また、適当にほっておいてほしいし。こっちは一生懸命考えてるのに、ここはこうなんだよと割りこんできたりしないで。これは僕の意見なんだよ、といって教えてほしい。
T	うーん。そのタイミングがその先生の力量だな。だめですね、僕は……。
全	〈笑〉
S 1	美術とはやり方というものが一通りでないから教えようがないし、本人がやるしかない。
T	自分が先生だとしたらどうしたらいい？ 〈笑〉
S 5	先生はオープンでいて欲しい。
T	やはり、僕は教えることに完全に自信はない。自分の得意なことしか自信はない。美術っていろんなことがあるでしょ。絵画ひとつでも自分はここだということしか自信はないんだ。この線はどういうものかとか専門家とはそういうことが激論になるんだが、でもそれで価値が決まってくるんだ。そういう次元のことで真剣にやっているんだということしかないんだ。端から見れば何で線一本にこだわるんだとばかばかしく思えるかもしれないが、この色は、このテクスチャが大切だと、そういうこだわりの態度を僕はみせていくしかないんだ。
S 3	先生っていなくなってもいい。美大とか目指す人にはデッサンとか教える必要もあるけど、ただやっている人には自分の好きなふうにやっていたらいい。とにかく、その辺にならなくてもいいぐらいで十分ではないでしょうか。
全	〈笑〉

T	<p>S3さんのいなくてもいいといっても、やはりいつも生徒のことを見つめている、大事にしている……その雰囲気はずなけりゃダメだよね。じゃあS1さんのように、自分でやるしかないというのに、こんなに一杯の人の中で何故やる必要があるのかというと、自分一人だけでやれるというのは、そこまでいくには本当に自分の表現はこれしかないという自信がないと無理なんだ。それまでは誰かと触発しあうしかないんだ。そんなことが美術の授業の大事なことだと思う。周りに誰かがいることで、ちょっとでも触発になる。そのようなことが大切だと思う、あまり結論はでませんでした、それでは最後のテーマ(4)の「美術に没頭することで君達にもたらす一番大切なこと」、それを言える人から言ってください。</p>
S1	<p>作品とかつくって、自分にはこんなことができるんだな—と思うことができること。</p>
S8	<p>雑念とか消してしまっ、自分が一番したいことが自由にできるというか、嫌なことがあったとしてもひとつのことに集中できて、ひとつのことをテーマに決めて仕上げられる。自由に自分のしたいことができること。作品をつくり終わった後に、作品として自分が仕上がったという感じが、他人の目として自分が見てとれる。</p>
S4	<p>何だか描いていてよく分からないけど、分かる時もある。起伏みたいなものあって、私が精神的にぐらついている時は描いていてぐらついたものしかならない。まだそこまで集中できてないのがいけないんだけど、自分との大きな関わりがあって私は描くということをやっているから、描くということが私と関わりあって、とりあえず一応完成！これで完成だと自分を見た時に充実感がある。昔のやつを見て、あー、こんなだったなと、あんまり自分のことを普段考えはしないと思うから。でも、とにかくこのへんだけじゃなくて、このへんとか全部、こことここが関係している感じがすごくいい。別によくないんじゃないけど、没頭して、あーできたな、できなかったらなんでできないんだろ……そんな感じがいいな。</p>
S7	<p>うーん没頭するって言っても、僕の場合やっても周りの声は入ってくる。私はしゃべりながらもできるタイプで、そこが他人は違う。とりあえずやって、やった後に人に見せますよね。それで人からの意見とか人を喜ばせたりすることが好きです。それで自分で楽しむって感じだから。わりと分かりやすい絵が好きだし、ピカソっていうより、人に受ける感じが。お客にコピを売っていると思う人もいるけど、僕はそれが好きだから。だから分かりやすい話とか好きだし、だけどそれが一番難しいことでもある。人には分からなくても自分だけ分かっていたらいいという世界もある。そうじゃなくて、人にも分かるし、自分にも気持ちいいし、それが一番じゃないかな……。だから、没頭はするけど、それ以上に人に見せちゃうのが好きです。</p>
S6	<p>やっぱりね、美術やっていること自体、一番こだわられるものだし、国語や数学でこれだけこだわられと言われてもできない！本当に美術が一番好きだし、それをやっている自分も好きだ。自分の描いた絵を他の人が見て、いいね！と共感できればそれがいい。お金が入ってくればもっといいな……。〈笑〉。今しか言えないからやっぱり言うけど、一生付きあっていきたいものだし、やっぱりクリエイティブな人間になりたい。</p>
S5	<p>なんか自己満足というか、……。当たり前の発想なんだけれど、自分が元気で音楽もそうだけれど、自分が元気で美術もそうだけれど、作曲とかは別だけれど、ただ聞くだけで……。考えてたけど忘れちゃった。〈笑〉なんか、何もなくて感じ。でも何か自己満足というか……。音楽ってなんかやっぱりうまい、へたがはっきりしている。決まったものあって、うまく弾けるとかがある。美術も技術はあるけど、自分でよければそれでいいという気がする。</p>

S 2	似ているかもしれないけれど、私、いろんなことに感動するんだけど、その時に絵を描くのが好きだし、うまくしゃべれないけれど……愛というか、人に絵を見せて喜ばれるのが好きです。あー上手だねと言ってきて、一応好きとか嫌いとか絵に関わると何をしても自分が満足するから……それがいい。
T	なるほど……。その残しておくっていう感覚が大切だね。意外とこれくらいの年になって、高校生の時のものを残しておくよね嫌なんだけど、だけれどもそれは残っている。その嫌なものがね。
S 2	自分がいたな！ そんな感じが……。
T	そう。そうだ、そのとおりだ。多分、その感じが他の教科にはあまりないんじゃないかな。恥でもいいんだ、表現するということは……。S 3さん、どうかな？
S 3	言われちゃった。〈笑〉私も満足で、やっている最中の自分がなんかうまくいっているとか、いないとか関係なく全部自己満足で。それでつまらないから帰りたいというのも満足。
S 5	ないという感覚が、みんなが好きという満足と同じ。
T	うーん、なるほどね。なかなか満足を得るということが学校にはないのかな、授業とか……。でもその満足を得るということはしんどいことをやらなくちゃいけないんだけどね。講義で聞いていけば、それはそれで楽だけどね。だから僕からの注文は「もうちょっと頑張ってくれよな……」ということをやってもらうけどね。ちょっとしんどいこと、やっぱり大人になって僕みたいに美術をしても、あえてしんどいことをやらなくちゃいけない。満足を得るために、先生もよき理解者でなければいけない。〈笑〉
全	うん、そうだ。
T	今日の話し合いはよかった。一応これで終わるね。どうもありがとう。発表会の時、この卒制を展示してるから、しっかりつくれよな。ものを表現することは、あえてプレッシャーを自分にかけること。頑張れよ！

3 本研究の成果

■ ディスカッションを終えた印象として、生徒たちと心から言葉をかわしたすがすがしさが残った。生徒たちが教師に求めるものは、作品を通じての心からの対話であったのではないか。登校拒否、中退等が増加する現状の中で、芸術教科は教育システムのマンネリ化からの浄化、再生を最も担える資質をもっている。そこを自覚し、新たに頑張りたいと思う。



「完成作品を大切に」

— 作品の装飾性・利用度を高める —

1 研究のねらい

美術科における絵画の指導は、制作を中心に行われ、制作が終われば作品は完成する。そこで、授業は終了するのが一般的な過程である。しかし、実際には、絵画は壁に飾るといった装飾的な行為を経て完成するのである。完成した作品を部屋の壁に掛けたときはじめて、作品が見るものに語りかけてくるのである。作品の評価もそのときに自ずとできるものである。

そこで、本研究においては、生徒が授業で制作した作品が実際に家庭に持ち帰られた後どのように利用されているのか、また、家庭では、どのような大きさや種類の作品が飾りやすく利用度が高いのかを生徒のアンケート調査から明らかにするとともに、そこから得た結果を授業に生かし、題材を改善することをねらいとした。

2 指導のねらい

- (1) 作品の最終的な行き場所である家庭において、作品を有効に利用しようとする意欲を育てる。
- (2) 作品の内容、大きさと額縁などの関係を生徒に理解させ、場所にあった展示方法などについても考えさせ、進んで作品を大切にすることを養う。

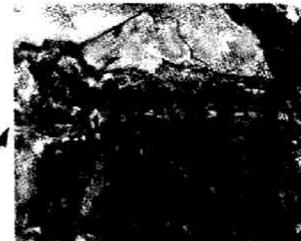
3 指導の実際

(1) 授業の計画

	1年生	作品の装飾	2年生
1 学 期	油絵（模写） F6号のキャンバスを 使用	<div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="background-color: black; color: white; padding: 5px; display: inline-block;">木枠をつけて完成</div> </div> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="background-color: black; color: white; padding: 5px; display: inline-block;">額縁に入れて完成</div> </div>	アナモルフォーズ
2 学 期	コラージュ		油 絵 F4号、SMのキャン バス使用
3 学 期	銅 版 画		素 描

(2) 指導のポイント

■ 木枠をつける



• A4のクリアファイルの中に模写の対象となる絵が入っている。

■ 作品の実際（油絵）



アガチスの木枠 {
• F6 は250円
• F4 は200円
• SM は130円

* 1年生は、F6号で模写を行った。

* 2年生は、F4号、SMの2枚の制作を行った。

■ 水彩の額に入れる

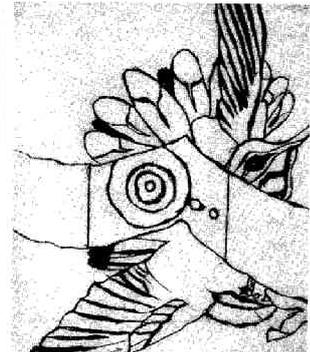
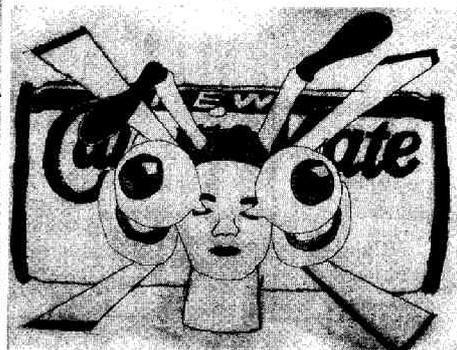
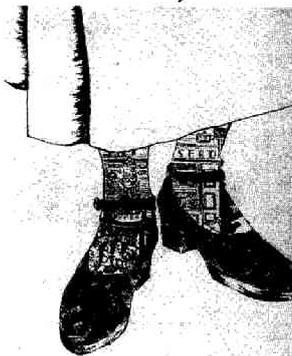
• 20×27センチの
枠におさまるよ
うコラージュ、
銅版画を制作さ
せる。



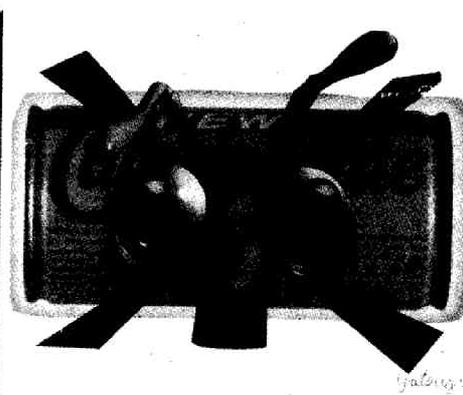
• サインは筆
記体で最後
に丁寧に記
入させる。

■ 生徒作品

銅版画
(ドライポイント)



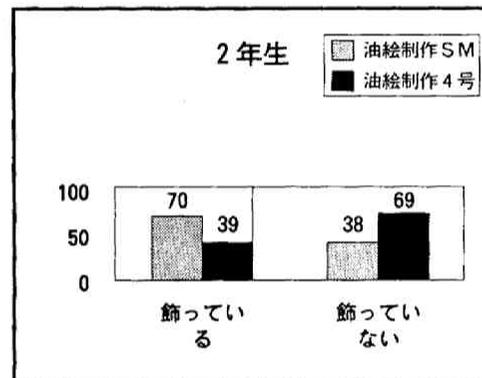
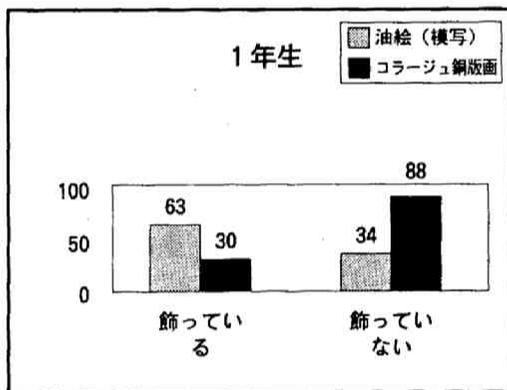
コ
ラ
ー
ジ
ュ



■ 生徒へのアンケート調査結果

- ・完成作品を家庭に持ち帰ってどうしたか。

場所		飾っている				飾っていない	
		玄関	自分の部屋	居間など	プレゼント	押入など	不明・廃棄
1年生	油絵模写6号	12	24	24	3	28	6
	コラージュ・銅版画	8	2	10	4	51	37
2年生	油絵制作SM	15	20	20	15	20	18
	油絵制作4号	2	14	15	8	37	32



■ 考察

アンケートの調査結果については、以下のように考えられる。

- ・家庭に持ち帰り、「飾る」「飾らない」ことに関する学年差は少なく半々である。
- ・版画やコラージュと油絵模写では、油絵模写の方が飾る率は高い。
- ・同じ油絵でもより小さい作品を飾る傾向にある。また、静物画や想像画よりも模写の方が飾られる率は高い。

4 成果と課題

■ 本校では、以前、8号以上の油絵の授業を行っていたが、生徒が完成作品を持ち帰らないで校内に置きっぱなしにすることが多かった。3年前より6号以下に変えてみたところ、置き去られる作品が激減した。大きな作品を伸び伸びと描くことも重要なことだが、描いた後、捨て去られるということも大きな問題である。日本の住宅環境のことも考えあわせると描く作品の大きさにも限界があるのではないか。

■ 1年生の授業で水彩額にコラージュ、銅版画などの作品を入れさせたが、調査の結果をみるとあまり有効に利用されているとは思われない。額のデザインや作品の内容も今後の検討課題である。